

真っ逆さま

望月修治

奨励者紹介 [もちづき・しゅうじ]

日本キリスト教団東灘教会牧師

週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために集まっていると、パウロは翌日出発する予定で人々に話をしたが、その話は夜中まで続いた。わたしたちが集まっていた階上の部屋には、たくさんのもし火ががついていた。エウティコという青年が、窓に腰を掛けていたが、パウロの話が長々と続いたので、ひどく眠気を催し、眠りこけて三階から下に落ちてしまった。起こしてみると、もう死んでいた。パウロは降りて行き、彼の上にかがみ込み、抱きかかえて言った。「騒ぐな。まだ生きている。」そして、また上に行って、パンを裂いて食べ、夜明けまで長い間話し続けてから出発した。人々は生き返った青年を連れて帰り、大いに慰められた。

(使徒言行録 20 章7—12 節)

まさかの旅

「人生には三つの坂がある。上り坂、下り坂、そしてまさか、だ。」結婚式や入社式などでよく使われるフレーズです。この言葉は松下電器、現在のパナソニックの創業者である松下幸之助さんが語った名言だといろいろな人が言っています。ですが、もともとは鎌倉時代前期から中期に生きた親鸞が語った言葉だといえます。今日の箇所は三つの坂のうち3番目の坂「まさか」のケースです。いや「まさか」ではなく「真っ逆さま」に3階の窓辺から落っこちてしまった青年の物語です。

物語の舞台はアジア州のエーゲ海に面したトロアスという港町です。3階の窓辺に座っていた青年が居眠りをしてしまって、下に落っこちてしまった、などというたわいもない、とっては言い過ぎかもしれませんが、そのような話がなぜ使徒言行録に収録されているのだろうか、と思います。

この話は、パウロの3回目の伝道旅行が終わろうとする時に起こった出来事なのです。パウロの伝道の旅は1回目、2回目、3回目いずれの旅も、迫害されたり、盗賊に狙われたり、嵐にあったりと、苦勞が続きました。特に3回目の伝道の旅は、予定変更の連続、「まさか」「まさか」の連続でした。まずその旅について少しだけ紹介します。

パウロの予定変更

パウロが伝道旅行の拠点としたのはシリア地方の中心都市アンティオキアという港町でした。エルサレムから北へ約500キロほど上った地中海に面した位置にありました。この地中海沿岸の町は、教会の信徒たちが「クリスティアノス」「クリスチャン」と呼ばれるようになった所です。それからローマ帝国時代にはクレオパトラとアントニウスが結婚式を挙げた町でもあり、歴史的に重要な意義をもっています。

パウロとその一行は、3回目となる伝道の旅もこのアンティオキアから出発しました。伝道の旅ですから、ちゃんとプランを立てて出発したはずですが、ところが3回目の旅は、全くプラン通りには行きませんでした。

た。何度も行く先を変更せざるを得ないという事態に見舞われます。どういう事情でそうなったのか、具体的には聖書に書いてありません。書いてあるのは「聖霊から禁じられて」という理由、そして次は「イエスの霊がそれを許さなかった」(使徒言行録 16 章7節)ためという理由で、予定変更を強いられてしまったということなのです。分かったような、分からないような理由だだと思います。

世の中では、予定を変更せずに、自らの作った計画通りに歩む人が評価されます。しかし一方で、人生には予定を変更せざるを得ないことが起こります。それも自分の失敗や力不足が理由でということも少なくはありません。そんな時、予定変更は後退あるいは負け組とみなされたりします。そのようなことが重なると、自己評価が低くなり、自信がなくなってしまうこともあります。

わたしの予定変更

私が今こうして牧師をしていることは思いがけない予定変更の結果です。牧師という道は、当初私の選択肢の中にはまったくなかったことでした。同志社大学に入学する時、神学部を受験する、つまり牧師を目指そうなどということは頭の片隅にもなかったことでした。学部時代の4年間は社会福祉を学びました。その間、神学書に関心が向くことは皆無だったと言っても言い過ぎではありません。そんな人間がなぜ牧師になったのか。使徒言行録に何回も記されている「聖霊が降る」というような決定的なことがあったのです、と言えば格好いいのですが、そんなことは何もありません。4年次生になる春休み、学生生活も最後の1年が始まる時に、「さあこれからどうする」と誰もが考えることは私も人並みに考え始めました。その時に思い浮かんだことの一つに、なぜか「牧師という道もあるな」がありました。その時は選択肢の一つとして軽く思い浮かんだという程度のことでした。その程度のことであった「牧師」という二文字がなぜか消えずに残り、広がり始めました。その思いの広がりに一つ応えてみていいかと思ってしまったことで、大きな予定変更が起こりました。神学研究科に入学し、3年間学び、計7年間の学生生活を同志社大学で送る結果になりました。

予定変更は時に辛い体験を伴うこともあります。予定変更の後、深く落ち込んでしまうことだって起こります。しかし予定変更は、自分が設計図を書く人生ではなく、与えられる出会いを通して、さまざまな気づきを得ながら人生を歩むことを学ばせるのです。それは生きることにとっての深い学びです。

「まさか」のダメ押し

パウロはいくたびもの予定変更を強いられた伝道の旅を締めくくって、エルサレムに向かう途上で、港町トロアスにやってきました。ここでパウロは、ダメ押しのように、またまさかの事態に出会うことになりました。

トロアスに7日間滞在したパウロは、明日出発するという前の晩、みんなと礼拝をしていました。その礼拝はある家の3階で行われました。最後の晩なので、パウロは大いに語りました。その話が長々と続くので、話を聞いていた一人の若者エウティコという人が居眠りをしてしまいます。運悪く彼は窓枠に腰をかけていたので、眠りこけて下に落ちこちてしまいました。大変だとばかりに駆け寄った誰かが「起こしてみると、もう死んでいた」と書かれています。転落死です。パウロも話を中断して階下に降りてきました。そしてエウティコを抱きかかえて、「騒ぐな、まだ生きている」と言うと、また部屋に引き返して夜明けまで話し

続けた、というのです。このパウロの振る舞いに興味を抱きます。

命を託す

3階から落っちた青年はどうなったのかと言えば、12節に「人々は生き返った青年を連れて帰り」とありますから、彼の人生はここで終わらずに済んだということです。だとすればこの青年は死んだのではなく、気を失っていただけということだったのでしょうか。そうではないのです。9節に「起こしてみると、もう死んでいた」とあります。「死ぬ」はネクロスという言葉が使われていて、文字通り死んだという意味です。12節の「生き返った」はゾーエーという言葉が使われていて、命、生きるという意味です。ですからこの青年は気を失っていたのではなく、3階から落っちて死んでしまった。そして生き返ったのだということなのです。しかし、この結末はパウロがもたらしたものではありません。パウロは青年を生き返らせようと必死になってはいません。そういう意味ではなにもしていません。委ねたのです。この青年が生き返るのか死んでしまうのか、そのいずれであっても、すべて委ねたのです。命の営みは外から届く力によって支えられている。外から届く力、つまり神の働きに青年の命の生死のすべてを託したのです。だからパウロはすぐにまた3階の部屋に戻って話し続けたのです。「騒ぐな、まだ生きている」というパウロの言葉はそういう意味だと思うのです。

外からの力

このような外からの力の訪れを大江健三郎さんが書いておられます。1987年、東京女子大学で大江健三郎さんは「信仰を持たない者の祈り」という講演をなさっています。その後この講演は、岩波書店から出版された「人生の習慣」(岩波書店 1992年)という著書の中に収録されました。ご子息の光(ひかり)さんと一緒に毎日を歩む中で体験し、深く心をとらえた出来事を語っておられます。光さんは頭に障がいを持って生まれました。その時の様子を大江健三郎さんは次のように書いておられます。「お医者に呼ばれて病院に行きますと、頭がちょうどふたつあるように見えるような奇形だった。頭蓋骨に小さな穴が空いていて、そこから脳が外に出てしまわないように、頭の外側に丸い^{こぶ}瘤^{こぶ}ができて、その中に脊髄液がたまっている。その圧力で脳を保護しているという状態だったのです」。……光さんは脳の外科手術を受けます。その結果、脳に障害は残りましたが生き延びることが出来ました。

光さんは生まれた時目が見えないのではないかとわれ、「光」と名づけられました。その後、目が見えることが分かったのですが、今度は耳が聞こえていないのではないかとわれられました。聞こえているのかいないのか分からないまま、光さんは成長しました。その頃、テレビで鳥の声を聴かせる番組があったのだそうです。それを見ていた光さんが何か反応したように、大江さんは感じる瞬間がありました。そこでレコード店に行って、手に入る鳥の声のレコードを全部買ってきました。それをテープに入れてエンドレステープの仕組みを作って、一日中、光さんが起きている間は鳥の声が家中に響くようにしました。そして1年がたちます。ある日、大江さんは、少しゆっくり過ごそうと思い、北軽井沢の知人の山小屋に妻のゆかりさんと光さんを伴って出かけました。夕暮れまでまだ少し時間があったので、大江さんは光さんを肩車して森の中に散歩に出かけました。山小屋の近くに小さな湖があって、その湖畔に行くと、クイナという鳥が

いてトントンと木を叩くような声で啼きました。「あ、クイナが啼いている」と大江さんは思いました。そのときです。頭の上で澄み切った声が「クイナです」と言いました。大江さんは緊張し、幻聴ではないかとも思ったのだそうです。次にまたクイナがトントンと啼くと、頭の上で光さんが「クイナです」と言う声が聞こえました。

鳥の声が録音されたテープには、例えばクイナの啼き声の後にアナウンサーが「クイナです」と鳥の名を告げる、そういう編集がされていました。光さんはそれを繰り返し聞いていたのです。急いで山小屋に戻った大江さんは、ゆかりさんに「光が『クイナです』と言った」と伝えました。その時ゆかりさんは「また新しい苦難が始まった」という目つきで私を見た大江さんは書いておられます。それでも「鳥の名を言うから聞こう」とゆかりさんを説得しました。でも、もう夜になっていました。夜は鳥が啼きません。ところがヨタカという鳥だけは啼く。悲鳴のような声でヨタカが一声啼きました。すると光さんが「ヨタカです」と言ったのです。大江さんとゆかりさんは興奮して、もう眠ることができなくて夜明けを待ちました。午前5時を過ぎ、夜が明け始めると、森中の鳥が啼きはじめました。そうすると光さんは「オナガです」「ウグイスです」「ニワトリです」と次々に鳥の名前を言いました。

最初の鳥の声を聞いて2番目の鳥の声が聞こえるまでの間、言葉が出ないと思っていた息子が本当に話せるのかを確かめるために、ひたすら黙って耳を傾けて待った。その間、自分の心にあったのは。祈りみたいなものであったと大江さんは書いておられます。そして次のようにも書いておられます。「信仰を持たないでいても、ある宗教的なものといえますか、祈りのようなものを自分が持っていると感じる時が、人生のいろいろな局面であったのです。やはり信仰の光のようなものがあって、向こうからの光がこちらに届いたことがあると私は思っているのです」。

人間には「信仰の光のようなものがあって、向こうから光がこちらに届く」ことがあったと大江さんは言います。示唆に富んだ大切な言葉だと思いました。行き詰まってしまった時、どこに向かったらいいのか分からなくなった時、私たちをもう一度立ち上がらせる光は、私たちの中からではなく、外から差し込んでくるのです。まるで潮が満ちるようにやって来るのです。

2023年 10 月 18 日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録